

いま、ここに ある命を救いたい 丸木夫妻の作品を若い世代に



原爆の図・丸木美術館学芸員

岡村 幸宣さん

プロフィール 2001年から原爆の図丸木美術館に学芸員として勤務。丸木夫妻に関する研究、展覧会の企画などをおこなっている。著書に『《原爆の図》全国巡回 占領下100万人が観た！』（新宿書房）、『非核芸術案内』（岩波書店）など。

か、怖いんだけど目を背けられなくなっ
たんです。「うまい」と思った。画集など
でいろんな絵を見ても、こんなにていね
いに上手に赤ちゃんが燃え上がる絵を描
いた作品はないんです。そのことはすこ
く印象に残っていて、大学生のときに実
習先を探すことになって、あの原爆の図
のある場所に行ってみるのもいいかもし
れないと思いついた記憶のベースになっ
ていたんだと思います。

大学では最先端の美術館事情を勉強す
るんですが、ここは全くそうではない。
美術館ができたのは1967年です。来
てみて美術館の概念が拡張されるほどび
っくりしました。みんな手書きでポスタ
ーを書いているし、展示作業を自分たちで
やるし、大学で学んでいることは全然
違う。でも絵が飾ってあるから美術館な
んだというところは、とても面白かった
です。学校で学んだことは、役に立たな

丸木美術館との 出会い

美術の大学で勉強していて、学芸員の
資格を取るための博物館実習で丸木美術

館を訪れたのが最初です。それが199
6年なので、丸木位里が亡くなった翌年
ですね。

最初に出会った作品の印象が、やっぱ
り強いですね。それは中学生のときに教
科書の口絵でみた第2部の「火」です。
火のなかに描かれた、炎に包まれた赤ち
ゃんの像は、子ども心にショックという

いだろうと予想はしてきたんです。けど流行とまったく違う真逆の場所の美術館も見たいと思っていたので、ここで実習をしました。

最初に頼まれた仕事は美術館の裏のタケノコ掘りで、タワを持たされました。そうしたら、竹やぶに着ぶくれたおばあちゃんがやってきて、それが丸木俊さんでした。まるで日本昔話を見ているようで、そのことがすごく衝撃だったんです。時代はどんどん新しいものを追いかけていくなかで、それとは全然違う時間が流れていて、そこにこの絵を大事に思ういろんな人が集まってつながつて一つのコミュニティができています。それにとても心を打たれて、美術館のお手伝いをするようになったんです。

そうしたら、丸木夫妻がお二人でやってきた美術館なので学芸員がいないからなってもらえないかと言われました。大変そうだし、原爆の図があるだけの場所だと思っていたので、そこで学芸員が働く意味があるのか分からずに断ったんです。その後、ヨーロッパを旅行して、小さな町や村にある小さな美術館・博物館を見て回っていくうちに、丸木美術館が違ったように見えてきました。大きな美

術館・博物館というのは、いろんな場所から優れた作品を集めている、いわば上澄みだけを持つていつてるんです。そうじゃなくて土地に根を下ろして、そこでき語り得ない、そこでしか見せることができなものを大事にする場所が、本当の美術館と博物館なんじゃないかと思つたんです。

そのとき、丸木美術館が、他にはない意味を持つものだと感じました。ここは原爆の図のためにつくられた場所で、建物は古いですけど、壁も天井も絵に合わせつくられています。みんなが大事に思っている絵があつて、その絵のために建物ができて、お金が集まって、手伝う人たちが出てきて、50年もつづいているわけです。こういう場所は他にないと思つて、ここで働くようになったんです。

原爆の図の誕生

原爆の図が生まれたのは、あの原爆の被害の記憶を伝えるためということは大きいんですけども、当時の社会状況は日本が連合国軍に占領されていて原爆の

写真を一切見せることができず被害について語れなかったという事情があります。また近年言われているのは、原爆の図が最初に描かれた年に朝鮮戦争が始まった、つまり過去を記憶するだけではなくて現在の時代に対する抵抗であるという、その両面を含んでいたと思うんです。

だから当時はとても問題作で、タイトルを変えたり、最初はかなり警戒をしながら見せていたけれど、見せちゃいけない時代だったからこそ見たいという人がたくさんいたんです。印刷物にすると捕まるかもしれないので、本物を直接見せれば人々に伝えることができるんじゃないかと、掛け軸にした絵を背負って日本中を回って、北海道から九州まで全国各地で巡回展がひらかれました。当時、沖縄は返還される前でした。沖縄で原爆の図が展示されるのは、復帰後の1978年です。

実際に会場責任者が逮捕されたりもしていますが、逮捕された次の会場だったデパートの社長さんが喜んで「ぜひやってくれ」と言ってきたり、たくさんの方がサポートしたんですね。人々は遅しかつたし、みんなで抵抗していこうとか、大事なものを見せていこうという気持ち

がありました。そのことによって、全国巡回は実現したんだろうと思います。

もしかすると、多くの人にとつて原爆の最初のイメージは写真ではなくて原爆の図であったかもしれません。大げさかもしれないけれど、戦後の日本の戦争に対するイメージ——もう二度と同じ過ちを繰り返しちゃいけないというイメージのもとになっているかもしれないという気がします。「親に原爆の図の展覧会に連れて行かれて人生が変わった」という証言も残っています。

若い世代と出会う ために

最近は公立学校の見学が少なくなつて、私立の子たちが多いんです。みなさん賢いので、こちらが意図することをすぐ理解してくれるので楽なんです(笑)。

昔は先生に尻を叩かれてくる子たちが多くて、整列もしない、おしゃべりが止まらないなかで「説明してください」と言われたんだけど、そちらのほうが僕はおもしろかったです。そういう子たちに

どうやって絵と出会う機会をつくれるのか、話のテクニクも磨かれました。それでも絵を観ないですぐ出ていっちゃう子もいるし、「こんな子が」って思うような子が一生懸命に観ることもある。でも、そういう子たちのほうが、実は切実に原爆の図の問題が、身近にあるのかもしれないんですよ。

好奇心のある子は自分で原爆の図に出会うかもしれないけれど、無理やり連れて来られなければ一生観る機会のない子たちも大事なんです。その子たちが命とはどういうものか、ちよつとでも考えてもらうきっかけになってほしいです。自分とは相容れない・分かり合えないかもしれない他人の命を、それでも大事にしなきゃいけないと思うきっかけに、原爆の図はなりうると思っています。過去を学ぶためだけの絵にはしたくないんです。いまの子たちを救えるような絵であつてほしいという気持ちがあります。いま、ここにある命を救えなくてどうするんだっていう気持ちはいつも持っています。いまは広島や沖縄の修学旅行が減っているの、事前学習に来る学校が減っています。子どもの数が減って学校が統廃合されるとか、平和教育に熱心だった世

代の先生が退職してその後の引き継ぎがうまくいかないとか、そもそも学校から外に出ることがすごく難しいとかいろいろ理由があると思います。「南京大虐殺の図」を観せちゃいけないとか、間接的にそういう話を聞くことはあるし、団体は非常に厳しいですね。団体が減っている分、個人の参観者を伸ばさなきゃいけないけれど、とても大変です。

どこの美術館・博物館でも、平和運動の状況も同じだと思うんですが、若い世代がなかなか関心を示さないという課題があつて、どうしてもお客さんはシニア層に偏ってしまうんです。どうすれば若い人と出会えるか、力を入れて取り組んでいきたいと思っています。

簡単にいうと、若い人に来てもらうためには若い人に関わってもらうのが一番です。うちの美術館は、戦争とか社会的なテーマは外せないんだけど、そういうテーマに関心を持っている若いアーティストやミュージシャンたちの企画を積極的にやっています。3・11(2011年の東日本大震災)をきっかけに、社会に関心を持つている若者は案外増えているんです。

時代が違うから当たり前なだけけれど、

原爆の図・丸木美術館

〒 355-0076

埼玉県東松山市下唐子1401

TEL 0493-22-3266

FAX 0493-24-8371



開館日 3月～11月 午前9時～午後5時

12月～2月 午前9時半～午後4時半

休館日 毎週月曜日（祝日にあたる場合は翌平日）、

12月29日～1月3日

無休期間 ゴールデンウィーク、8月1日～8月15日

入館料 大人 900円、中高生または18歳未満 600円、

小学生 400円

比企東松山地域在住、チラシ持参、20人以上の団体、60歳以上で100円引き

障がい者 大人 450円、中高生または18歳

未満 300円、小学生 200円

いままでとは若い人のリアリティが違うので、表現の仕方は全然違ってきます。絵を描かないビデオのアートだったりインスタレーション（空間展示）だったり、「こんなこと、丸木美術館でやるの？」という表現も増えてきています。でも、若い人の展示会に来た若い世代の人たちは、原爆の図も観るし、大事な部分に反応するんです。そこは、僕は若者を信頼して

います。この美術館に来て、ここで考えて、直接的にも間接的にも丸木夫妻の作品の影響を受けた人を、どんどん送り出していきたいんです。

学校の先生へ

僕は年齢に関係なく一人でも多くの人に丸木夫妻の作品を観てほしいと思っています。

昨年、原爆の図をもとに、アーサービナードさんが紙芝居「ちっちゃいこえ」を出しました。あれはとても重要で、すでにあるものを語り直して新しいものを生み出しているんですよね。戦後日本は平和に関してすごく大きな蓄積があるんです。残された多くの蓄積をどう新しく編み直して、いまの新鮮な力を生み出せるかが、すごく大事だと思っんです。すでにあるものをそのまま見せても、子どもたちには古く感じてしまう。そこにいまの時代の視点が込められることで、また命が吹き込まれると思うんですね。なにかを子どもたちに手わたすときは、すでにある財産を新しく生かすことが重要

です。そのために原爆の図や丸木美術館ができることはお手伝いをしてきたいと思えます。まだまだ原爆の図が示していることは現在進行形の問題だし、我々の生きる世界と直結していますよね。

最近では、戦争体験者が少なくなっていくなかで、どうやって戦争体験を語り継いでいくかという課題があります。そういう活動をしているところは少ないので、県内の高校に呼ばれて話をする機会もあります。

最近、教員の免許更新制度ができましたよね。その更新講習で丸木美術館を活用するうごきもあるんです。大東文化大学の先生が毎年、免許更新の講習で丸木美術館を使った教育プログラムをつくるワークショップをやっているんです。そこに県立高校の先生が参加されて、昨年の夏休みに生徒を連れて来てくれたんです。学校に原爆の図のレプリカを展示してくれて、僕も学校で講演したり、演劇部の生徒が紙芝居を朗読したり。

それは免許更新講習に来た若い先生が、自分で考えてやったことなんです。制度自体は問題があるけれど、そのなかでできることもあるんだなって、すごく学ばせてもらいました。